

(要約版)

中国の詩人杜甫と白居易の心身に飲酒が果たした役割

研究助成者：許山秀樹（静岡大学 情報学部）

1. 研究目的

李白、杜甫、白居易はいずれも大詩人であり、今日まで多くの研究がなされてきた。しかし、3人の人生で酒あるいは飲酒行為、その他嗜好品が果たした役割についての研究は、必ずしも十分ではない。酒が3人の詩のなかに多数登場するという事実は、人が生きていく上で飲酒が何らかの役割を持っていたことを示唆する。豪放な李白、憂愁の杜甫、楽天の白居易というタイプの異なる対照的な性格の3人の関連作品を比較することによって、酒、およびその他の嗜好品が人生にどのような役割を果たしていたかを知ることができる。

更に、酒に対する接し方を知ること、酒への好ましい接し方、好ましくない接し方を考えるヒントになるのではないかと考えている。李白の享年は62、杜甫は59であり、当時にあってはまずまずの寿命だが、白居易の享年75は明らかに長寿である。この長寿を達成するために、白居易はどのような生活態度を持っていたのかをこの調査から推察することが可能であろう。

本研究は、酒から出発し、その他の嗜好品をも射程に置く。人類幸福のために嗜好品はいかにあるべきか——それを知る手がかりを古典詩人のおびただしい作品群の中に見出す試みである。

2. 研究方法

酒に関する李白（701-762、62歳没）の現存する作品約1000首、杜甫（712-770、59歳没）の現存する作品約1400首、白居易（772-846、75歳没）の現存する作品約2900首のうち、主要なものを中心に調査する。その際、詩人がどのような状況に置かれていたか、酒をどのような心境で飲んでいたら、誰と飲んでいたら、酒が詩の中でどのような役割を果たしているか、酒がどのような表現として使われているかを調査する。この際、作品データベースを活用し、酒とともに用いられやすいキーワードの多寡を調べ、李白、杜甫と白居易の差を明らかにする。長寿をもたらす飲酒とはどのようなものを二人の詩のなかから明らかにする。

李白、杜甫と白居易の酒に関係する作品を、年齢・官職・場所・季節・同席者・環境・心境などの諸点との関わりを検証する。飲酒によって、詩人の心境がどのように変化しているか、飲酒がどのような役割を果たしていたかを調査する。

本研究の題目は「中国の詩人杜甫と白居易の心身に飲酒が果たした役割」であり、「李白」の名がない。2019年8月9日の「採択者と研究審議員とのディスカッション」

の席上、「中国古典詩における酒を論じるのであれば、調査対象から李白を加えるべきだ」という指摘を受けた。本研究はその意見を踏まえ、李白、杜甫、白居易の三詩人の飲酒詩を考察する。

3. 成果

今回、酒に絞って、中国唐代の代表的詩人、李白、杜甫、白居易の詩を調査した。「豪放な李白、憂愁の杜甫、楽天の白居易」と評される詩風が概ね、飲酒詩にも反映されていたことを確認した。いくつかの詩語（美酒、痛飲、半酣、詩酒、琴酒、卯酒、新酒）についてはデータベースを活用し、その頻度を確認した。「美酒」の表現は李白詩に頻出した。「蘭陵の美酒 鬱金香（蘭陵産の美酒 酒名は鬱金香）、玉椀盛り来たる 琥珀の光（玉の盃に注がれた琥珀の液体）」がその代表である。酒の魅力を称賛し、また、飲酒自体の飲びを高らかに詠い上げる表現であり、李白詩の個性の一つと言えよう。

一方、「痛飲」という詩語は、杜甫詩に見られる。李白詩にはない。とことんのめり込む杜甫の個性の一つと言えようか。「近ごろ辞す 痛飲の徒なるを（最近は飲んだくれをやめ）、節を折る 万夫の後（みな言うことをおとなしく聞いている）」がその一例である。

そして、「半酣、詩酒、琴酒、卯酒、新酒」は白居易に多く見られた。飲酒に対する距離感、適切な飲量、適度な飲み方、美味しい飲み方がそこには反映されている。白居易に「ほろ酔い」を愛する態度が見られたのは新たな発見であった。「半酣半飽の時（ほろ酔い五分腹になったころ）、四体 春悠悠たり（私のからだは春のごとくゆったりとなる）」にその用例が見られる。

1300年以上も前の詩人の寿命の長短の原因を論じることは科学的には意味がない。したがって、ここで論じることは、あくまで仮説の一つに過ぎないことを予め述べておく。3人の飲酒詩を概覧すると、李白の豪放な態度、杜甫のやや退廃的な態度、白居易の適度な距離を持つ態度を看取できた。健康的な飲酒態度で言えば、白居易が最も健康的であり、李白がそれに次ぐ。杜甫は痛飲することが多々有り、体調が悪いときにも飲んでいただと思われるなど、不健康といえるものであった。李白 62歳、杜甫 59歳、白居易 75歳の寿命を考える時、この飲酒における態度はそのまま寿命の長短と対応関係にあると思われる。当時の酒の成分や度数も不明であり、また、3人の遺伝的体質、環境などもわからない。それを無視して論じることはかなり乱暴であろう。ただ、作品から垣間見える3人の飲酒態度はそれぞれの寿命の長短に十分反映されていると言えよう。

本研究から出発して、他の嗜好品、たとえば、茶に関する作品も考察を開始した。その成果は別に論じたい。